

第3幕「ヴァナキュラーな言語と文化—中世イギリス、江戸時代の越後、  
植民地時代のキューバを例に—」

## 中世の英語文学とヴァナキュラーとしての歩み

——チョーサー， 地方語， 周縁性

岡本広毅

### 1. はじめに

世界に普及する英語の効用の一つは、母語話者の文化の伝達だけでなく、非母語話者同士のコミュニケーションを促進する共通語（リンガ・フランカ）としての役割にあるだろう。現状、英語は特定の国々の「国語」として以上に「外国語」として学ばれている。こうした状況の変化は英語で書かれる文学のあり方にも及ぶ。約半世紀前、インド系英語作家サルマン・ラシュディは、イギリスの旧植民地で生まれた文学を指す用語＝「コモンウェルス文学」の問題点を指摘した。一見、英米以外の英語圏の作品を容認するこの新たな括りには、その実、イギリスを「中心」、その他を「周縁」とする差別化が潜んでいる、という。「コモンウェルス文学」なる枠組みは、英語で書かれる文学の複雑さと多様性を“something far narrower, something topographical, nationalistic, possibly even racially segregationist”とする可能性を孕み、ラシュディはそれを「排他的なゲットー」(“an exclusive ghetto”)と批判した。代わりに、彼は“English literature”を“simply the literature of the English language” (63)、すなわち「英語で書かれた文学作品＝英語文学」という意味で用いるのである。これは英語の現状、そして行く末を見据えた次のような観察に基づく。

What seems to me to be happening is that those peoples who were once colonized by the language are now rapidly remaking it, domesticating it, becoming more and more relaxed about the way they use it—assisted by the English language’s enormous flexibility and size, they are carving out large territories for themselves within its frontiers. (64)

英語はリメイクされ、飼いならされ、使用に対してより緩やかに展開している。複数の英語話者が「広大な領土を開拓してゆく」とき、彼らの言語は一定の民族性や政治性を帯びない、より開かれた媒体となるのである。<sup>1)</sup>

このように、英語の概念は単数形の“English”から複数形の“Englishes”「英語変種」へと変容し、その文学的諸相も変わりつつある。そうした中、そもそもの出発点となる中世の英語文学研究はどのような意味をもちうるのか。本論を進めていく上で、まず英語の一般的な歴史区分を示しておく。

<b>Old English</b> 〈古英語〉	450 - 1100	<b>“The Middle Ages”</b> “Medieval” (adj.) 〈中世英文学〉 〈中世英語文学〉
<b>Middle English</b> 〈中英語〉	1100 - 1500	
<b>Modern English</b> 〈近代英語〉	1500 - 1900	
<b>Present-Day English</b> 〈現代英語〉	1900 - 現在	

古英語・中英語期の両者を含む〈中世英語文学〉は、ともすれば、混じりけの無い〈英文学〉の源とされるかもしれない。しかし、同時にそれは〈英語文学〉の土壌であることも忘れてはならない。そもそも、英語は「一英語」という名の下、間断なく一直線上に発達してきたわけではない。この連続性は近代以降に生まれた便宜上の見方に過ぎず、そこには国民国家の創造を巡るナショナリズムが影を落としている。肝要なことは、英語の成分は決して単一ではなく、様々な国・民族・言語が複合的に交わり発展していったという歴史ではないか。ラシュディのいう“the English language’s enormous flexibility and size”に関しても、中世の時代から徐々にその下地が形作られていった。「シングリッシュ」や「スパングリッシュ」など、新種の英語の展開は目新しい現象でなく、これまでの変容の軌跡の一端に他ならない。

本論ではまず、〈英語文学〉の出発点として中世からの歩みを概観し、その際に英語の「ヴァナキュラー」としての性質に着眼する。ヴァナキュラーは中世英語の一つの特色であるばかりか、現代英語を取り巻く複合的な言語文化をみる上でも重要な視点であると考えられる。後半は、特に中英語期を代表する詩人ジェフリー・チョーサーの作品に焦点を当て、当時の英語使用の意味やヴァナキュラー作者としての一面を考察する。総じて、本論は中世の言語文化と今日展開される英語文化との接点を探ってゆく。

## 2. 英語・英語文学——ヴァナキュラーとしての歩み

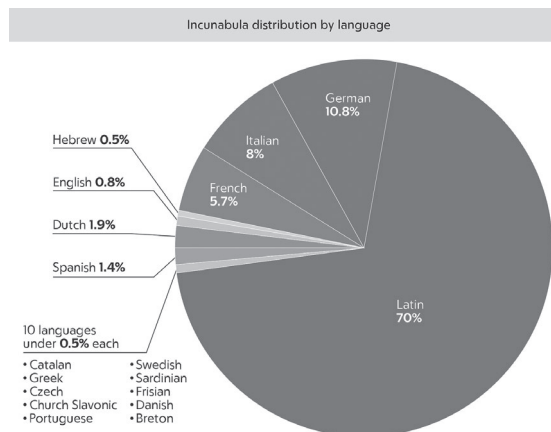
「ヴァナキュラー」はラテン語の“vernaculus”に由来し、元々「外地ではなく地元で育った奴隷」を指す言葉であった。これが「国内や特定の土地の固有性」を表す意味へと拡大し、比喩を伴い様々に用いられるようになった。*The Oxford English Dictionary* (以後 *OED*) によると、“vernacular”の初例（英語として最初に用いられた例）は1601年で、「特定の土地やその地域本来の、土着の言語を書く・使う・話す」ことを指す形容詞であった。<sup>2)</sup> その後、特定の土地で自然に話される言語・方言との関連性を強め（2a. 初出1647）、特定の土着言語に翻訳された文学作品を表すようにもなった（3a. 初出1661）。また、商業的・社会的・教育的目的のために習得する他言語の対概念としても用いられた。<sup>3)</sup> 19世紀以降、地域や土地に根差した建築様式やその特徴を示す用語にも派生し、今日の文化研究における一つの学術的キーワードとなっている。<sup>4)</sup>

「ヴァナキュラー」を巡る意味の拡張・転用は、時代や価値観の変遷をみる上で興味深い。ウェルズ恵子はヴァナキュラー文化について、「たとえ過去の文化を扱っていても、その分析は必ず現在の文化を知るための鍵になる。ヴァナキュラー文化は権威の箱に収まることなく連続し、

変化しながら生き続けているもの」(vi) と述べる。ヴァナキュラー文化の理解には歴史的考察と変化に対する柔軟な姿勢が望まれよう。また、小長谷英代はヴァナキュラー研究の有用性について、「〈ヴァナキュラー〉の語感にともなう意味の多義性、特に土地との連想や周辺のもの、雑多なもの、劣位のものといった否定的なニュアンスの奥行きが、近代思想・学問の主流や正統に軽視・無視されてきた文化、社会、歴史の文脈に光をあてる手がかりとなっている」（2018, 221）と指摘する。

英語は「権威の箱」に収まることなく変化し生き続け、「否定的なニュアンスの奥行き」を追求してきた言語である。約 1500 年に及ぶ英語の歩みは〈周縁〉から〈中心〉、〈地方〉から〈世界〉へと至る一ヴァナキュラー言語の躍進の軌跡といえよう。英語の現状からすれば意外に映るが、それは元々ヨーロッパ北西で話されていた一地方語に過ぎなかった。その実質のルーツは 5 世紀にブリテン島に移住した民族の話し言葉に遡る。大陸より侵入したゲルマン民族の一派アングロ・サクソン人の言葉が現代英語の土台となっている。6 世紀のキリスト教の伝来に伴い、英語話者の祖先は文字文化を獲得し、年代記や教訓詩、英雄詩などの文芸作品を残した。この「古英語期」には、今日のファンタジー文学の原石ともいえる最古の英語叙事詩『ベオウルフ』も生まれている。また、ウェスト・サクソン地域の方言は一時標準的な地位を確立するに至った、とされる (Baugh and Cable 50)。しかしながら、イングランドは 8 世紀後半から 11 世紀にかけて北欧人のヴァイキングから度重なる襲撃を受け、その後のノルマン征服によってアングロ・サクソン人を基調とする英語社会は大きく変化した。後者は 1066 年、フランス北西部ノルマンディー公ウィリアムがイングランドを征服した出来事で、結果、島内の大部分はフランス出身の王侯貴族に統治され、彼らの用いたアングロ・ノルマン語（フランス語の一種）が宮廷や議会、法廷などで用いられる公用語となった。ノルマン人は“Northman”を語源とし、第二のヴァイキング襲来ともいわれる。今から約一千年前、英語は「被支配者の言語」となり、公的な場からほとんど姿を消したのである。

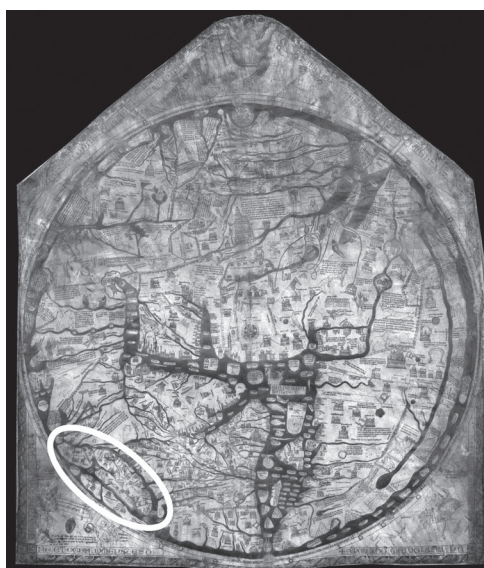
15 世紀、ヨハン・ゲーテンベルクによって発明された活版印刷術はヨーロッパ各地に伝播したが、以下、最初期の印刷物（「インキュナブラ（揺籃印刷本）」と呼ばれる）の使用言語比率をみると、現代の「グローバル」な状況とはかけ離れた中世の英語の地位を確認できる。



By Datavizzer - Own work, CC BY-SA 4.0, <https://commons.wikimedia.org/w/index.php?curid=103971758>

英語の出版物の割合は1%以下と極めて少ない。<sup>5)</sup> 中世ヨーロッパでは、ローマ・カトリック教会を中枢とするキリスト教世界が支配的な文化を形成していた。ローマ帝国の遺産であるラテン語は教会の公用言語となり、ギリシャ語やヘブライ語と並んで聖なる言葉でもあった。中世のリテラシー能力は何よりラテン語による読み書きを意味したのである。また、中世後期のイングランドでは先述のノルマン人支配の下、フランス語が一種の特権的地位を占め、宮廷や法廷、商人団体の記録などでも用いられた。ラテン語やフランス語の文化的威信のもと、英語は長らく一般庶民の言葉にとどまった。統一言語はおろか、地域ごとに異なる綴り(発音)の「英語」が散乱した。ノルマン征服を境に移行する「中英語期」は、「方言の時代」ともいわれる。<sup>6)</sup> Svartvik, et al. はこの時期の英語を敢えて“Middle Englishes”と呼ぶが、これは正鵠を射ている(36)。中英語期の地域差は規模や状況は違えど、今日多様に枝分かれする「英語変種」の一縮図とみることが可能であろう。ただ現代の英語に比べ、中英語は公的権威をもたず社会的地位は極めて低かった。

英語の言語的劣位は、当時のイングランドの地理的認識や国家意識とも深く関係していた。Kathy Lavezzo は、当時の地図製作の観点から中世世界におけるブリテン島/イングランドを巡るナショナル・アイデンティティの諸相を考察している。中世ヨーロッパで作成された世界地図“mappae mundi”では、エルサレムやローマといった聖書・古典世界は〈中心部〉、ブリテン島はその彼方の〈周縁部〉に位置している。<sup>7)</sup> これは単なる地理的隔たりでなく、ある種の文化的劣等感を示唆していよう。ただしラヴェッツォによると、周縁性は決して劣位を意味するだけでなかった、という。



1300年頃に作成されたヘレフォード世界地図。線で囲った場所がブリテン島。(イングランド、ヘレフォード大聖堂蔵)

The English were not simply self-conscious of their marginality during the Middle Ages; English writers and cartographers actively participated in the construction of England as a global borderland. (*Angels on the Edge of the World*, 7)

イングランドの“global borderland”「世界の辺縁」としての意識は、自国の特異性の主張とも緊密に結びつき、その克服を通して国家のアイデンティティ形成に参加していた。<sup>8)</sup> たしかに周縁部とはいえ、ブリテン島は他の地域よりも比較的大きく、多くの具体的な都市名も書き込まれている。〈周縁〉は必ずしも負の価値を帯びるだけではなく、〈中心〉への力学を内包しているのである。

概して、中世の英語は文化的威信をもたない一地方言語であった。ただ、ブリテン島を巡る

多民族の侵攻や多文化との接触は、現代英語の特色づける多言語性あるいは国際性の素地を築いたといえよう。中世の英語は地理上の特性や歴史的背景が折り重なり成立し、変化や多様性に富むヴァナキュラー性を帯びたのである。

### 3. ジェフリー・チョーサーとヴァナキュラーの浮上

ノルマン征服以後、被支配者の言語となった英語は、14世紀ごろに浮上の兆しを見せる。当時、ヨーロッパに甚大な被害をもたらしたペスト (= 黒死病) の蔓延は、ブリテン島にも同様の被害をもたらし、特に環境に恵まれない下層の人々の命を多く奪った。ただ、こうした社会の根底を支える労働力の激減により、働き手である農民や一般庶民の社会的需要が高まり、彼らの日常語である英語の価値の向上へとつながった。また、百年戦争によるフランスへの敵愾心が自国意識を高揚させた、ともいわれる。1362年の国会は初めて英語で開会され、1399年に即位したヘンリー4世の王位継承権の宣言も英語で行われた。<sup>9)</sup>

14世紀の終わり頃、『農夫ピアズの夢』(ウィリアム・ラングランド作)、『ガウェイン卿と緑の騎士』(作者不詳)、『恋する男の告白』(ジョン・ガワー作)など、英語で書かれた作品が多く現れた。中でも、ジェフリー・チョーサー(1343年頃-1400)は中世英語文学最大の文人で、『トロイルスとクリセイデ』や『カンタベリー物語』など多くの作品を著した。チョーサーはロンドンの一地区で裕福なワイン商人の息子として生まれ育った。当時のロンドンは北西ヨーロッパの主要な交易地で、人口約4万人の大都市であった。多様な人々が行き交い織り成す国際的な環境が彼の感性の礎となったに違いない。宮廷仕事に従事する役人となったチョーサーは、その傍らで詩作を行い数々の作品を著した。外交使節団の一員としてフランスやイタリアの文化先進都市を訪れ、ダンテの『神曲』やボッカチオの『デカメロン』に親しみ、その背後に広がる古代・中世ラテン文学の世界の深淵に触れた(池上84)。よって、チョーサーの初期の作品は基本、フランス語やラテン語作品からの翻訳であって、彼はヨーロッパ先進国の文芸思潮の中で古の権威ある書物の再生に努めたのである。イングランドの詩人は「偉大なる翻訳者」として大陸でも名が通るほどであった。

知識人であり国際人であったチョーサーはフランス語やラテン語にも精通していた。しかし、彼はその全著作を英語=ヴァナキュラーで執筆した。この首尾一貫した姿勢は、国家意識の発露というより国際経験の賜物として説明されることがある。英語による執筆の真意は“European project”の一環というわけである(Pearsall 90)。時代はイタリアの詩人ダンテ(1265-1321)の提唱する「俗語論」、つまり、ラテン語に対する「俗語・ヴァナキュラー」の擁護へと傾いていた。『俗語詩論』(*De vulgari eloquentia*)において、ヴァナキュラー言語とは「音声を認識し始めた幼児が修得するもの」、あるいは、「形式的な教育ではなく乳母を真似ることによって学ぶもの」と定義される。<sup>10)</sup>ラテン語などの修得言語に比して「俗語」は「より高貴」であり、日常の言語の潜在能力に大いなる価値が見出された。本書は、イタリアに存在する“the most respectable and illustrious vernacular”(27)を探究するものであるが、その意義は一国の言語にとどまらない。Copelandが“de facto ascendancy of vernacular culture”(180)と呼ぶように、本論は「ヴァナキュラー文化」そのものへの見方を変える分岐点であり、ひいては「近代諸言語の独立宣言」(Botterill,

xviii) とも評される功績である。<sup>11)</sup>

チョーサーの英語による執筆は、庶民の日常生活やその土地に根差した言語文化に対する好意的な姿勢とみることができるといえる。国際舞台への頻繁な露出や先進文化との出会いは、自国への内なる視線を深めたと考えられる。ヨーロッパ文化への傾倒は、Glending Olson のいう “the establishment of a distinctly English participation in contemporary European letters” (580) と本質的に反目することはない。“Chaucer became a European writer by, paradoxically, becoming an English writer” (55) と評する James Simpson の言は言い得て妙である。イングリッシュネスの自覚とヨーロッパ的志向性を対立的に捉える必要はない。いずれにせよ、地方性と国際性を内包する自国語の使用は、英語を軸とするヴァナキュラー文化への見識を深める重要な契機となったことは疑いない。では、チョーサーのヴァナキュラー性は具体的にどのような部分にみられるのだろうか。

#### 4. 英語の多様性と『カンタベリー物語』における方言

『カンタベリー物語』の前に書かれたロマンス『トロイルスとクリセイデ』の末尾には、英語執筆を取り巻く自国語の状況とその決断に伴う苦悩が次のような言葉で綴られている。

Go, litel bok, go, litel myn tragedye,

...

And kis the steppes where as thow seest pace

Virgile, Ovide, Omer, Lucan, and Stace.

And for ther is so gret diversite

In English and in writyng of oure tonge,

So prey I God that non myswrite the,

Ne the mysmetre for defaute of tonge; (V 1786-96, 下線筆者)

さあゆけ、小さき書よ、ゆけ、小さきわが悲劇よ

...

そして、彼らの歩み、その足跡に口づけをせよ

ウェルギリウス、オウィディウス、ホメロス、ルカヌス、スタティウスの。

というのも、著しい多様性が

英語に、そして我々の言葉の綴りに存在しているのだ

私は誰もが汝を書き誤らないよう神に祈る

言語の不備ゆえに、韻律も間違えないように。<sup>12)</sup>

錚々たる古典詩人を前に、自身の作品は「小さき書」である。これは英語による執筆を卑下し

た言い方で、先人が残した古典作品に対する未熟さを吐露したもののように思われる。それは、“so gret diversite”「著しい多様様」に起因する“oure tonge”「我々のことば」＝「英語」の至らなさである。一方、これは「謙遜のトボス」と呼ばれる一種の定型的表現でもあり、「古典作家の足跡への口づけ」には、ゆくゆくは自分が肩を並べようとする気概が見え隠れする。チョーサーの語りには“the layers of irony and concealed assertion” (Evans, et al. 320) が潜んでいるのだ。<sup>13)</sup>

英語の現状に対する客観的把握のもと、チョーサーの取り組みは晩年の大作『カンタベリー物語』へと継承される。ここで多様性は不利ではなく、むしろヴァナキュラー言語文化と紐づく強みとなり結実する。『カンタベリー物語』は、イングランド各地からロンドンのとある旅籠屋で一堂に会した総勢 29 名によるカンタベリー大聖堂への巡礼の物語である。春の訪れとともに、人々はいざ“straunge strondes” (l. 13)「見知らぬ土地」、 “ferne halwes” (l. 14)「遠方の聖地」を求め旅に出る。この汎ヨーロッパのキリスト教信仰文化を背景に、“every shires ende / Of Engelond” (ll. 15-16)「イングランドの諸州の隅々」から集う人々へと焦点は絞られる。この“ende”は、MEDによると“The border, edge, or outlying part (of a country, region, the world), the outskirts (of a city or village)”とあり、様々な空間的次元における「端・縁」を意味する。<sup>14)</sup> この語が象徴的に示すように、『カンタベリー物語』の冒頭では「世界の辺縁」としてのイングランドに光が当てられるばかりか、国内の「隅々」から来た人々が巡礼の旅を彩る主役となるのだ。

宿屋の主人ハリー・ベイリーの提案のもと、あらゆる身分や職種の人々が旅の道中の楽しみ・慰めとして話を披露する。はじめ、一団を仕切る宿屋の主人に誘われ、クジ引きにより巡礼者の中で身分の高い騎士が話を披露することとなる。「騎士の話」の主要舞台は古代ギリシャの宮廷で、アテネ大公に囚われたテーベの王族パラモンとアルシーテが、エミリー姫を巡って恋の争奪戦を繰り広げる。この後、酩酊の粉屋が対抗心を燃やして乱入し、同時代のイングランドのオックスフォードを舞台とする話——学生ニコラスと教区書記アブサロンによる大工の若妻アリスンを巡る恋の争奪戦——を披露する。次にこの「粉屋の話」に激高した荘園管理人が、舞台をケンブリッジの郊外へと移し、粉屋の水車小屋を訪れた学生アレンとジョンがその女房と娘を手籠めにし、粉屋の鼻を明かす話を語る。このように「騎士の話」を起点に、当初予定していた順序は早々に乱れ、同時に語り手の身分の差や物語内の空間的・時間的落差が鮮やかに印象づけられる。John Ganim がこれらの話が属する Fragment I について、“his (=Chaucer) characters or stories shuttle between intensely local or regional allegiances on the one hand, and an international culture, usually aristocratic but sometimes clerical, on the other” (207) と述べるように、古代の大陸世界（貴族の宮廷）から同時代の国内地方（庶民の生活空間）へと照準が移るのである (207)。これは「総序の歌」の冒頭にみられたヴァナキュラー的移行を体現していると考えられよう。

「騎士の話」に続く「粉屋の話」「荘園管理人の話」はともに庶民の生活空間が主要舞台となるが、特に後者ではイングランド一地域の言葉が重要な役割を果たしている。『荘園管理人の話』は、ケンブリッジの近くの村に住む粉屋シムキンとその家族、そして来訪者の神学生二人とのやりとりを中心に展開する。シムキンは大学から粉や穀物をくすねる常習犯で、彼の不正を見かねた学生アレンとジョンが、学寮長の許可のもと粉屋を訪れる。いざ、粉ひき場へやってき

た二人であったが、シムキンに出鼻を挫かれる。しかし、その晩、学生は揺りかごを使った巧妙なやり口でもって妻と娘を寝取った挙句、製粉も奪い返し粉屋を打ち負かす。興味深いことに、この学生たちはイングランドの北部出身とされ、地方の言葉話を話している。これは英文学史上、初めて方言が文学作品に取り入れられた例とされる。先述のチョーサーの言葉にもあるように、イングランドには著しい方言差が存在し、地域間の意思疎通に支障をきたしていた。特に、北部地域の言葉は“Al þe longage of þe Norþhumbres, and specialych at 3ork, ys so scharp, slytting, and frotyng, and vnschape”と記されるように、「鋭さ、かん高さ、歯ざりし、不明瞭」といった特殊性が取り沙汰されていたのである。<sup>15)</sup> チョーサーはこの一風変わった話し方を学生の会話に盛り込むばかりか、当時の北部地域の音声・語彙・文法的特徴を精確に反映している。この言語への関心は文学的効果とも関連し、粗野で田舎臭いことばを話す学生が虚栄心の強いシムキンを打倒する結末に、ファブリオ特有の滑稽味が倍増する、という見解もある。<sup>16)</sup> 一方、菊池清明は13世紀後半から14世紀前半における英語の使用状況とナショナル・アイデンティティの確立・深化に着目し、チョーサーの方言使用の意味を国家的次元へと引き上げて考察する。

・・・・つまり、英語に、そして方言にさえ適切な自信をもつことが自国語文学を発展させる基本であり、ラテン文学への過度の劣等感むしろ妨げになること、そしてラテン文化を脱し、イギリスの自立を確立させるためには自国の風土や文化に根差した試みが必要なことは明らかである。そう考えると、方言に象徴される俗 (Vulgar) / 民衆 / 周縁の文化を尊重することから新たな文学の地平が開けてくることをすでにチョーサーは巨視的に把握していたといえる。(52)

指摘にあるように、方言の導入はチョーサーのヴァナキュラー文化への肯定的な見解を示しているのではないか。英語の使用から一歩踏み込んだ、一国の内なる地方語への関心は改めて画期的である。

小長谷は、近代以降、土着の言語が民族・国民意識の鼓舞する原動力となり、それまでの否定的な評価が好転する過程を次のように記している。「・・・ラテン語に対するヴァナキュラーであった言語は、公用語あるいは国家の支配的言語へと転換され、そのプロセスでは逆に国内の方言等、少数派のヴァナキュラーを抑圧していく」(2017, 35)。これはあくまでも近代以降の事象についてはあるが、チョーサーの英語による執筆と国内方言との関係性を考える上で一つのヒントとなるだろう。果たしてチョーサーは英語を推進する中で、国内のヴァナキュラーを「抑圧」しているのか。

この点で、『莊園管理人の話』の中の方言に対して、何ら否定的な価値判断が下されていないことは注目に値する。本作が属するファブリオは、人物の行動よりも言葉遊びや技巧に力点を置く文学ジャンルといわれている。<sup>17)</sup> チョーサーはこの系譜に沿い北部方言を塗すことで物語を脚色した。当然、この言語的妙味から生まれる笑いの瞬間や場面が想定されよう。しかし、本作には方言そのものに対する揶揄や偏見はみられない。粉屋シムキンは突然の来訪者である学生の言動を怪しみ学識を嘲るものの、彼らの話し方そのものには別段反応を示すことはない。シムキンが社会的上昇志向の強い人物であることを考慮すれば、彼らの田舎訛りへの無反応は



不思議ですらある。現に、15世紀のタウンリー劇“The Second Shepherd’s Play”（『第二羊飼い劇』c. 1430）では、マックという人物の南部風の気取った言葉が嘲笑の対象となり、羊飼いに「その南部方言をやめなさい！」とたしなめられる場面がある（“What! ich be a yoman” (l. 201) ... / “Now take out that Sothren to the, /And sett in a torde!” (l. 215)。<sup>18)</sup> この例をみても、地域の言葉遣いに対する反応の余地は十分想定されるし、ましてや言葉遊びに立脚するファブリオであれば、こうしたやりとりが追求されてしかるべきではないか。しかし、地方訛りの会話が物語の具体的な展開と連動し、滑稽な笑いと直結することはないのである。

14世紀に北部の話し口調を記したジョン・トレヴィサによると、その顕著な特徴は語彙や統語、文法ではなく音声にある。“Hit semeþ a greet wonder how Englische, [þat is þe burþe tonge of Englissh] men and her owne language and tonge, is so dyuerse of sown in þis oon ilond” (161, 下線筆者)「一つの島で英語（イングランド人生来の言葉）にこれだけ多様な音があることは極めて驚くべきことに思われる」とあるように、イングランドの南北の地域差は主に音の違いに起因するのである。<sup>19)</sup> 皮肉なことに、北部学生のアレンとジョンにとってこの音の認識こそが粉屋への仕返しとの契機となる。夕食の席で飲み食いに興じ寝床に引き上げた粉屋一家は即刻眠りに伏せ、鼾の大合奏（三重奏）を奏でる。アレンとジョンはシムキン一家の身体から発せられるその下品な音を耳にし、逆襲を誓う。

Men myghte hir rowtyng heere two furlong;  
The wenche rowteth eek, *par compaignye*.  
Aleyn the clerk, that herde this melodye,  
He poked John, and seyde, “Slepestow?  
Herdestow evere slyk a sang er now? (4166-70)

あのいびきなら、四四〇ヤード [約四百メートル] 先からでも聞き逃すことはなかったほど。娘もまた、これに付き合い、仲睦まじくぐうぐうと大いびきをかくのでした。この美しい調べを聞いた学生のアランがジョンを肘でつついて、そっと小さな声で話しました。「おい、寝てんのか。今までこんな歌を聞いたことあるか。」(191)

響き渡る一家の轟音は“melodye”「メロディー」であり、“sang”「歌」と皮肉交じりに記されている。<sup>20)</sup> 北部出身の二人はこれらの「快音」に促され、粉屋打倒に乗り出すのである。異質な音を発する（と見なされる）北方人が自らの聴覚を通して状況を打開してゆくこの場面は、地域言葉への従来の想定を裏切る意味で興味深い。

また、一連の騒動の現場である「粉挽き場」も、北部方言の響きの観点から注目に値する。学生の粉屋訪問の目的は、“And forthy is I come, and eek Alayn, / To grynde oure corn and carie it ham agayn” (ll. 4031-32) とあるように、穀物を挽いて無事学寮へ持ち帰ることである。この“grind”は学生がシムキン家の人々を「挽く」行為、すなわちその後の展開を占う極めてセクシュアルな暗示を含み、彼らの行動や特性を見事に表しているといえよう (Lancashire 166-67)。<sup>21)</sup> 一方、“grind”という行為は彼らの発話の性質とも重なる。*The Middle English Dictionary* (MED) は中

英語 “grinden” に “to grind (one’s teeth, tusks), gnash” (2b) という語義を与えているが、「歯噛み・歯ざしり」を意味するこの発声は当時の北部方言の癖のある響きと極めて近い。<sup>22)</sup> 例えば、“grind” 「粉挽き」の音に関する否定的な含意は、『ガウェイン卿と緑の騎士』においてみられる。イングランド北西部に位置する（と思しき）緑の礼拝堂で、緑の騎士が斧を研ぎ澄ましガウェインを待ち受ける様子が次のように記されている。

Pene herde he of þat hyȝe hil, in a harde roche  
 Biȝonde þe broke, in a bonk, a wonder breme noyse,  
 Quat! hit clatered in þe clyff, as hit cleue schulde,  
 As one vpon a gryndelston hade grounden a syþe.  
 What! hit wharred and whette, as water at a mulne;  
 What! hit rusched and ronge, rawþe to here. (2199-204)

その時であった、ガウェインはその高台から、細川の彼方にある  
 丘の斜面の巖の中で、耳を弄する凄まじき物音がするのを聞いたのだ。  
 ざあー、ざあー。その音は切り立つ絶壁の中で、幾度も幾度も反響し、  
 まるでまわりの崖を裂き割ってしまうかのほど、  
 さてまた砥石で大鎌が研がれているかのごとき音であった。<sup>23)</sup>  
 ざあー。ざあー、ざあー、ぎし、ぎしと、水車場の暴れ水かと響き渡った。  
 びゅー。びゅーびゅー、がーん、がーん、がーんと、聞くも不気味に、あたり一面に  
 鳴り響くのであった。(129)

約束の一撃に向けて戦斧を磨くその音は「凄まじい物音」で、「砥石 (“gryndelston”) で大鎌が研がれているかのごとき音」や「水車場の暴れ水」 (“water at a mulne”) に喩えられる。ここでは “grind” に紐づくノイズが緑の騎士と対峙する円卓の騎士の恐怖心を煽り、不穏な行く末を演出している。翻って、緑の騎士と近い地域的背景を有するアレンとジョンにとって、「粉挽き場」は彼らの言語的特性を活かす適当な場ではないか。にもかかわらず、彼らは粉屋に対して「不気味な音」を発し脅威となるわけでもなく、ただただごちないやりとりを続けるばかりである。「粉挽き場」は彼らの地域的ポテンシャルが発揮されない象徴的な場なのだ。

このように「荘園管理人の話」には方言への反応が入り込む余地がみられるものの、その言語の異質性が指摘されたり、プロットと連動することはない。別の話ではあるが、チャーサー自身が語る『トープス卿の話』ではその最中、宿屋の主人が中断させ “Myne eres aken of thy drasty speche” (1. 923) 「おかげでわしの耳はその下らない話でずきずきしてらあ」(646) と不快感を露わにする場面がある。他の巡礼者の割り込みは『カンタベリー物語』の演出の臨場感を高める一つの見どころでもある。しかしながら、『荘園管理人の話』に対しては主人のような言動をとる者はおらず、介入や中断もなく、地方言語を操る北部の学生に軍配があがり幕を閉じる。総じて、『カンタベリー物語』において地域の方が貶められたり抑圧されることはなく、実に中立的に描かれている。

チョーサーは国内の方言と通常時の英語の言葉遣いを同等に記し、そこで社会的あるいは文化的な差をもたせることはしない。両者を分け隔てなく描き出すチョーサーの根底には、次の言葉にあるような言語の変化全般に対する大局的な認識があるのではないだろうか。

Ye knowe ek that in forme of speche is chaunge  
Withinne a thousand yeer, and wordes tho  
That hadden pris, now wonder nyce and straunge . . .  
(*Troilus and Criseyde* II. 22-24).

皆さんもご存じのとおり、言葉の形は  
千年も経たないうちに変化し、かつて  
価値のあった言葉は、今や実に馬鹿げて奇妙なものになっている

もともと“prys”「価値」のあった語も、長き歳月を経て“nyce and straunge”「馬鹿げて奇妙」となる。これは逆もしかりであろう。“straunge”といわれる北部の言葉も、将来的には「価値」をもつ可能性は否定できない。<sup>24)</sup> この時間上の言語変化と空間（地理）上の言語変化は関連している。ダンテは『俗語詩論』の中で、人の変化と同様、時間・空間の隔たりによって生じる言語の分化を指摘していた (Botterill 21)。<sup>25)</sup> すなわち、言語の可変性や多様性はヴァナキュラーの本質的要素なのである。したがって、チョーサーの言語変化に対する通時的な把握は、国内の地域差に対する寛容な姿勢とも通底するもののように思われる。

## 5. 「エルフのような」詩人

北部学生の発話とともに物語を披露するのはノーフォーク出身の荘園管理人オズワルドである。彼の出自は南北両地域の言葉を解する格好の人物設定でもあるだろう。<sup>26)</sup> 一方で、彼は“he rood the hyndreste of oure route” (l. 622) と記されるように、巡礼者一行の“the hyndreste”「最後尾」から歩を進めている。この周縁的位置取りは彼の年齢によるものかもしれない。話を披露する直前、語り手オズワルドは自身の晩年をワイン樽に見立てて表現する。

For sikerly, whan I was bore, anon  
Deeth drough the tappe of lyf and leet it gon,  
And ever sithe hath so the tappe yronne  
Til that almoost al empty is the tonne.  
The streem of lyf now droppeth on the chymbe.  
The sely tonge may wel ryng and chymbe  
Of wrecchednesse that passed is ful yooere; (I 3891-97)

本当なんじゃ、わしが生まれるとすぐに死神の奴が樽の栓を抜いて、そのまま流れるまま

にしておきやがった。それからというもの、見ての通りずっと流れ放題、もう樽はほとんど空っぽじゃ。生命の流れが、今じゃ、一滴ずつぽたぽたと樽の縁に漏れ落ちている。年寄りの哀れな舌の先が、ずっと昔に過ぎ去った不幸な話を喧しく繰り返しふれまわって喋るのも無理のねえことだ。(180)

これは人間の生をワインの流れになぞらえた独特の比喩である。誕生の瞬間から湧き出たワインは老境に差し掛かった今、樽の“chimbe”「縁」へと弱々しく滴り落ちているというのである。ワイン樽の構造への言及は、チョーサー家の職業柄が反映されたもの、という指摘もある(MacLaine 129)。また、老人オズワルドの晩年は当時のチョーサーとも年齢的に近く、彼の言葉には作者の心情が重ねられているのかもしれない。そのような人物は、ここで人生の黄昏を“chymbe”「縁」という語で言い表し、なおかつ“chimbe (n)”(MED, 1 (b), “of speech, “ring out, be voiced”)という動詞と韻を踏ませて用いている。これは脚韻部を「同形同音異義語」で合わせる巧みな手法で、オズワルドの言語的技量を指し示すものである。<sup>27)</sup> 其上、“sely tonge”「哀れな舌の先」と形容される老人の口からは、生き生きとした学生の方言が紡ぎ出されるのだ。MEDはこの“tonge”を“6 (b) “the clapper of a bell;—used fig.”「鐘の舌」を比喩的に表す唯一の例に挙げている。ただ、これは文字通り、彼の「言語」であり、『トロイルスとクリセイデ』にあった“oure tonge”「我々の言葉」、すなわち「英語」に他ならない。<sup>28)</sup>

『カンタベリー物語』は様々な年齢層や職種、地域性をもつ人々が織り成す言説空間である。本作で多用される人々の物語への反応(“diverse folk diversely they seyde”)はこの事実を示し、同時に“diverse folk”への視線は、荘園管理人オズワルドのような「縁／周縁」にいる人々への配慮でもある。<sup>29)</sup> これはチョーサーの「辺境人」としてのメンタリティーに基づくものではないだろうか。そこには、〈中央〉と〈地方〉を対立軸とせず、「境界」という同次元から両者の価値を追究するヴァナキュラー作者の一面が潜んでいよう。この点で、自身のペルソナである巡礼者チョーサーの描かれ方は注目に値する。『女子修道院長の話』の後、宿屋の主人ハリー・ベイリーは次のように話しかける。

... “What man artow?” quod he;  
 “Thou lookest as thou woldest fynde an hare,  
 For evere upon the ground I se thee stare.

“Approche neer, and looke up murily.  
 Now war yow, sires, and lat this man have place!  
 He in the waast is shape as wel as I;  
 This were a popet in an arm t'enbrace  
 For any womman, smal and fair of face.  
 He semeth elvyssh by his contenance,  
 For unto no wight dooth he daliaunce. (VII. 695-704, 下線筆者)

「お前さんはどういう方かね。まるで野兎でも探そうとしているような顔つきだ。地面ばかりをじっと見つめていなさるものね。

さあもっとこっちへ寄ってらっしゃいよ。楽しそうに顔をあげなされ。さあ皆さん、この人に場所を空けてあげてください。おや、私と同じような腰つきをしていなさる。これはすうりとした美貌のご婦人方が腕に抱き締めたくなるようなお人形さんみたいだよ。表情といったら、妖精のように捉えどころがないね。誰とでも馴れ馴れしくお喋りしそうにないよ。(633)

「あなたは何者か?」という根源的な問いかけに続き、彼は「妖精のように捉えどころがない」と評される。原文ではここは“elvyssh”と記されている。この目を引く形容詞について、*OED* は以下の語義を与え、初例として挙げている。

2. Like an elf in behaviour: † (a) spiteful, cross-grained, peevish; also *transferred* of diseases, Irritating, troublesome (*obsolete*); (b) (ow in a milder sense) tricky, mischievous (cf. *ELFISH adj.*).

本個所にみられるチョーサーの面持ちからするに、「意地悪で気難しい」「いたずら好き」といった「エルフのような振舞い」は見て取れない。<sup>30)</sup> 宿屋の主人がわざわざ“Approche neer, and looke up murily”と促すほど、巡礼者チョーサーは一団の輪に入れていなかったのである。

では、この描写は何を意味するのか。J. A. Burrow は初期の作品中に実際に顔を出すチョーサーの内向的な自画像を検証している。その上で、“elvyssh”は「控えめで扱いづらい」作者の佇まい、“his authorial privacy and privilege against readerly intrusion” (“Elvish Chaucer” 106) を戯画的に表している、という。実際にこの場面における非社交的な印象 (“unto no wight dooth he daliaunce”) は、かえって主人の注意を引くほどである。一方、“elvyssh”を字義どおりに解釈する場合、チョーサーがこの後披露する『トープス卿の話』の内容と紐づけられる。『トープス卿の話』はポピュラー・ロマンスの典型である。そこは“elf-queene”「妖精の王妃」や“geaunt”「巨人」といった生き物が登場する“The contree of Fairye” (802)「妖精の国」で、チョーサーの「エルフ性」は自身が披露するこの話への伏線となる。ただ、この種のロマンスは当時使い古され陳腐な文学様式となっていた。『パースのおかみの話』の冒頭で言及される“elf”には、時代錯誤の意味合いが込められている。ここでは古英語に由来する“elf”がフランス語から派生した“fairy”と同義に用いられる。

In th' olde dayes of the Kyng Arthour,  
Of which that Britons speken greet honour,  
Al was this land fulfild of fayerye.  
The elf-queene, with hir joly compaignye,  
Daunced ful ofte in many a grene mede.  
This was the olde opinion, as I rede;  
I speke of manye hundred yeres ago.

But now kan no man se none elves mo, (III. 857-64, 下線筆者)

ブリトン人が誇り高く語る、いにしえのアーサー王の御世の頃、この国はどこも妖精たちで満ちあふれていました。妖精の女王が彼女の陽気な一団をしたがえて、しばしば緑の牧場でダンスを踊っていました。わたしの読んだところ、昔はそのように、信じられていたようですが、それは何百年も前のお話です。ですがいまではもはや誰も妖精を見ることはできません。(292)

ここでのアーサー王の治世は異民族サクソン人との交戦の時代ではなく、「フェアリー／エルフ」で溢れるファンタジー的空間である。ただ、それは遙か昔のことで、今やその姿は見られない。「フェアリー／エルフ」のこうした特性は、チョーサーの自己表象とも深いかかわりをもつ。「エルフのような」詩人とは現実には存在しない「異世界の住人」であり、時代に取り残された「遺物」でもあるのだ(巡礼者の間では「異物」として見られているのかもしれない)。作者チョーサーはそうした連想をもつ語とともに自身のペルソナを提示することで、自己の周縁性・他者性を表現しているといえよう。

「エルフのような」作者像は彼のナショナル・アイデンティティの密かな表明でもある。ラヴェッツは、中世のロマンス作品にみられるフェアリー／エルフの地理的・文化的周縁性に着目し、チョーサーに投影されるそれらの意味合いを論及している。<sup>31)</sup> すなわち、「エルフのような」詩人は「世界」におけるイングランドの地理上の感覚、その「辺境人」としての心性を暗に示すというのである。ゆえに、“When Chaucer gazes upon the ground—that is, English territory—and calls himself elvish, he is also calling himself English” (“England” 62) と結論づける。チョーサーの「エルフ性」は「イングランド人」としての紛うことなき印というわけだ。詩人の視線の先にある母国の大地は、カンタベリーへと向かう巡礼者の旅の舞台、すなわち「イングランドの諸州の隅々」を出自とする多種多様な人々＝「他者」の織り成す空間である。その一員であるチョーサー自身、作者としての「中心的な」位置からではなく、「エルフ」の衣を纏う「他者」として物語に関与する。つまるところ、こうした他者への眼差しをもつ辺境人として自覚が、国内の方言にみられるヴァナキユラー文化への共鳴を生んだのではないか。当時、社会的にも文化的にも価値の低かった英語文学の新境地は、ヴァナキユラーへの深い見識によって開拓されようとしていたのである。<sup>32)</sup>

## 6. おわりに

本稿では、中世ヨーロッパの一ヴァナキユラーとして出発した英語の歩みを概観し、中世英語文学を代表する詩人ジェフリー・チョーサーの英語観や国家意識の諸相を検討した。〈地方語〉から〈世界語〉へと至る英語の歴史は、チョーサーの後世の受容にも影響を及ぼしている。なぜなら、英語への関心の高まりや「英文学」の制度化を経て、この一辺境の俗語作者は権威を帯びた存在となったからである。中世英語文学としては異例なことであるが、チョーサー作品の受容と聖典化は作者の死後より始まった。<sup>33)</sup> 18世紀、ジョン・ドライデンより「英詩の父」

と称されたチョーサーは、特に「イングリッシュネス」を体現する詩人として認識された。しかし、それは Evans et al. が述べるように、“the mythic point of origin for the English literary tradition to this day” (320) でもある。「英詩の父像」の過度の投影は、作品の根底にある複数の巡礼者の声、それぞれの話の材源、フランスやイタリアそして地中海をも含むコスモポリタンな文化、また国内の地方や方言（「俗語」の中の「俗語」）といった豊かな視界を狭めてしまう。<sup>34)</sup> チョーサーの英語の採用は、国際人・イングランド人・辺境人といった複数の次元にまたがる決断であったといえよう。そう考えると、この中世詩人の英語への姿勢は本稿のはじめに触れたラシュディの英語観やその多様性の認識とも通じ合う。このように、中世の英語は連綿たる変化と多様性を内包し、今日展開する新たな英語やそれを取り巻く多元的な言語文化を理解する重要な手がかりとなるのである。

## 注

- 1) ラシュディは英語の話者について、“The English language ceased to be the sole possession of the English some time ago” (70) と記している。英語は特定の民族・文化の介入しない“neutral ground” (Svartvik et al. 7) としての機能をもつといえよう。なお、日本語の「英文学」の内実は曖昧だが、「英米文学」は「英」と「米」で構成されるため、イギリスとアメリカのみを示すフレーズである。よって、ラシュディのいう“English Literature”の訳としては「英語文学」が当てはまる。一方、「英語圏文学」なる表現も植民地主義の遺産と紐づけられ、時に否定的に解されることがある。この点は長岡を参照。また、ラシュディの議論については大熊を参照。
- 2) 1. That writes, uses, or speaks the native or indigenous language of a country or district.
- 3) 2a. Of a language or dialect: That is naturally spoken by the people of a particular country or district; native, indigenous. また、その注記を参照。
- 4) *OED* “vernacular,” n, 6 を参照。「ヴァナキュラー建築」の初出は 1857 年である。日本でも「ヴァナキュラー」を冠する研究は近年増えつつあるが、「ヴァナキュラー」という用語の定着には至っていないようである。この用語は既存の民俗学（フォークロア）に対する否定的なイメージの払拭のもと、特に 21 世紀以降、積極的に使われ始めた、という。小長谷は「ヴァナキュラー」の浮上と再概念化について、西洋人文学の根幹をなす文献学（フィロロジ）への昨今の回帰に着目し、「文献学の新たな動きは、ヴァナキュラーへの関心を喚起する一つの伏流となっている」(2017, 29) と指摘している。27-69 を参照。とりわけ、比較言語学の勃興とともに発展・深化したフィロロジは中世英語英文学研究の動向と深く関連し、それゆえ今日のヴァナキュラー研究とも高い親和性を有している。また用語については島村 33-38 を参照。
- 5) イングランドでは最初の印刷業者ウィリアム・キャクストンが多くの自国語作品を出版した。本論で扱う『カンタベリー物語』は、キャクストンが国内で最初に印刷を手掛けた大作である。
- 6) Baugh and Cable, 183-87; Burrow and Turville-Petre, 3-8 を参照。
- 7) ヘレフォード図を見るには次のサイトが非常に便利である。 <https://www.themappamundi.co.uk/>
- 8) 従来、中英語テキストはその地方性が過度に注目されるあまり、作品内に潜むより広範な歴史的・文化的意義が看過される傾向にあった。その一つの要因として、中世世界におけるネイションの概念の欠如が指摘される。中世ブリテン島のネイション意識に関して、R. R. Davis は、政治性や市民性が過度に強調される近代のネイション論を冷静に捉え、民族・文化・神話などに目配りをしたよりバランスのとれた議論の必要性を説いている。

On any *longue durée* view of ethnic and national identity, the modernist emphasis on the political and

civic features of nations and nationalism – so natural to us today – surely needs to be balanced by the attention that needs to be given to the ethnic, the cultural and what may be called, by way of shorthand, the genealogical-mythical. National identity is fundamentally multi-dimensional; as historians we should not privilege one of those dimensions. (568)

- 9) これらの点については, Baugh and Cable, 135-137, 142-143 を参照。
- 10) Botterill 3 頁。以下, 『俗語詩論』からの引用は Botterill に依る。
- 11) ダンテによるヴァナキチャー文化の向上と英語作者への影響については, Copeland 179-220 を参照。また Evans, et al. 318-19 を参照。Copeland の書は “vernacularity” を批評用語として定着させた影響力のある研究である。これに関しては Minnis 16 頁と 172 頁の注 71。OED の初出からも確認できるように, “vernacular” は中世の文献には用いられないが, ダンテの用いた “vulgar” はその意味合いに近く, 以後英語でも用いられるようになった。実際, チョーサーに後続する詩人ジョン・リドゲイトは, チョーサーのことを “vulgar tongue” へと翻訳した詩人と評している。“vernacular” は “vulgar” に取って代わり, その野卑や粗野といったニュアンスを払拭したといえよう。
- 12) 以後, チョーサーの原典から引用は Larry D. Benson 版 *The Riverside Chaucer* に依る。また, 『カンタベリー物語』の日本語訳は池上忠弘監訳『カンタベリー物語——共同新訳版』に依拠する。
- 13) 海老は, チョーサーはフランス語やラテン語に比した英語の語彙・表現力の乏しさを認めていたとしても, 謙遜のトポスは「かえって, チョーサーは英語の力不足を逆手にとって, 自分の力で英語を磨いていこうとする意欲の婉曲な表現」であるとし, 「まだ磨かれていない英語という原石への可能性を信頼していた」と述べている (10)。
- 14) MED, “ende” n. (1) 17 を参照。
- 15) John Trevisa は, 14 世紀末にラナルフ・ヒグデンの『万国史』を英訳したが, この一連の言葉は頻繁に引き合いに出される。Churchill Babington and Joseph Lumby 版の II. 163 を参照。
- 16) 本論では方言の分析には立ち入らないが, 詳細については Tolkien, Muscatine を参照。また, 方言に関する近年の議論については Okamoto を参照。
- 17) ファブリオジャンルの言語的側面に関しては Muscatine 167, Hines 17-18 を参照。
- 18) 『第二羊飼い劇』からの引用は Cawley 版に依拠する。本劇における南部方言の使用については本校訂本の Appendix IV, 131 参照。Cawley は南部方言の意図を, 喜劇的效果を高めるものとしている。
- 19) この点は Blake 135 頁を参照。
- 20) この場面は『粉屋の話』の中のニコラスとアリソンが「歓喜」と「メロディー」(I. 3652) と呼ばれる性行為に耽る場面に呼応している。
- 21) OED, “grind,” s. v. 11. *intransitive and transitive*. To copulate (with).
- 22) 北部の特徴的な音は, かん高さや歯ざしりのような擦れる音であった。トレヴィサの引用にもあった “slytting” “frotting” はそのような意味合いが含まれる。MED s.v. “slitten” v. 1 (c) to cut (sth.), split, divide; also *fig.*; slice (vegetables, fruit); *pl.* slitting, *fig.* piercing, shrill; “fröten” v. 3 (b) froting, strident or harsh (speech).
- 23) 本作品の引用 Tolkien and Gordon 版 (2<sup>nd</sup> rev. by Norman Davies) に依拠する。また日本語訳は菊池に依る。
- 24) *Treatise on the Astrolabe* (『アストラベ (天体観測儀書)』) の序文には, 他国と国語の関係からチョーサーの英語観の一端を表される。Olson はここからチョーサーの “linguistic relativism” (582) を指摘するほどである。
- 25) 岩倉はダンテの言語観を次のように記している。「・・・またイタリアで最初の文学のための言語がどのように創造されたかを明かにし, 詩文学のための言語は, 自国語を離脱することによっていわば人為的に完成されるべき共通語であることを見抜いたのは, さすがに鋭い洞察であったといわねばならな



い。そのほかの言語をつねに静止の状態であえようとした当時のスコラ哲学的言語観の常識を破って、人間と人間社会の変化にともなう表現形態も変化するという言語の性質を正確に把握したのは、当時においては驚異的ともいべき独創的見解であった。」(3)

26) この点については、Okamoto 18-19 参照。

27) Kokeritz は “In medieval poetics the linking in rhyme of two homonyms or of the same word in different senses was considered a tour de force and was widely practised” (945) と述べている。また、オズワルドは序文でも “for age/forage” (I 3867, 3868) という脚韻を行っている。

28) 一方、OED は 14. In many technical applications の d を “The clapper of a bell; hence, the pistil or a stamen of a bell-flower” とし、初例を 1577 としている。

29) 例えば「粉屋の話」への反応 (I. 3857)、また、「弁護士の話」 (“Diverse men diverse thynges seyden” l. 211) 「商人の話」 (“Diverse men diversely hym tolde” l. 1469) など。

30) OED は 1 の語義で “Of or pertaining to elves; having the nature of an elf; supernatural, weird” を挙げるが、本箇所はここには含まれない。MED は 1. (a) “Belonging or pertaining to the elves; possessing supernatural skill or powers; (b) mysterious, strange; (c) elf-like, otherworldly” とし、(c) で本例を挙げている。また、Chaucer’s Glossary では “otherworldly, inhuman” とある。松田はこの形容詞の使用について、「特定の身分にも職業にも属さず、他の巡礼たちと実体化のレベルが異なるチョーサーの形容としては的を射ている」(197) と述べている。

31) ラヴェッソンの議論は Green の研究に依拠したものである。Green は “The Canon’s Yeoman’s Tale” で錬金術師の用いる “elvish” に焦点を当て、“liminality” の観点から分析している。

32) 実際にはチョーサーは「エルフ」ではなく、あくまでも「エルフのような」 (“semeth elvyssh”) 存在であることは重要であろう。これは他者からの見られ方の問題であり、後の変化の可能性を示唆する表現でもある。現に、『トープス卿の話』が中断された直後、チョーサーは厳肅な道徳話である『メリベウスの話』を披露し、その変わり身の早さを証明する形となる。<sup>(32)</sup> ところで、『ガウェイン卿と緑の騎士』に登場する「緑の騎士」にも “elvish” の特性が付与されている。本作は、チョーサーが太古の世界としたアーサー王の物語を真正面から扱っている。王都キャメロットに挑戦を仕掛ける「緑の騎士」は宮廷人から “an aluisch mon” (Tolkien and Gordon, l. 681) 「現世のものとは思われぬかの如き男」と呼ばれる。その後、挑戦を受けたガウェインがイングランドの北西部へと向かいそこで再会を果たすことから、緑の騎士は「地方からの使者」であるといえよう。チョーサーを首都ロンドンにいる「エルフ」とみた場合、緑の騎士は「辺境のさらに奥地」より〈中央〉へとやってくる「エルフ」となる。こうした地域間を巡る他者の表象は興味深い。

33) この点については Evans, 特に 347-52 を参照。

34) 本論で扱ったチョーサーの北部方言に関して、とりわけ 18 世紀以降の「英詩の父像」形成の言説空間においてどのように受容されたかは今後検討されるべきであろう。

## 参考文献

池上忠弘. 「チョーサーと中世ヨーロッパ文学伝統一チョーサー文学の成立に向かって」 *Seijo English monographs* (英文学専攻紀要) 37: 75-98.

岩倉具忠. 「ダンテの言語観とその背景: 附「俗語詩論」第一巻全訳」 29 卷, 1980, 1-71 頁.

ウェルズ恵子編. 『ヴァナキュラー文化と現代社会』 思文閣出版, 2018.

大熊榮. 「サルマン・ルシュディと英語」 『英語圏文学——国家・文化・記憶をめぐるフォーラム』 竹谷悦子・長岡真吾・中田元子・山口恵里子編 (監修・横山幸三), 人文書院, 2002, 141-55 頁.

海老久人. 「チョーサーと英語ナショナリズム」 『神戸女子大学文学部紀要』 45 号, 2012, 1-19 頁.

菊池清明. 『中世英語英文学 I ——その言語・文化の特質』 春風社, 2015.

- 菊池清明訳.『ガウエイン卿と緑の騎士——中世イギリスロマンス』春風社, 2017.
- 小長谷英代.『<フォーク>からの転回—文化批判と領域史—』春風社, 2017.
- .[「ヴァナキュラー」の実践——アメリカのアーツ・アンド・クラフツ運動]『ヴァナキュラー文化と現代社会』ウェルズ恵子編, 思文閣出版, 2018. 221-37頁.
- ジェフリー・チョーサー著/池上忠弘監訳.『カンタベリー物語—共同新訳版』悠書館, 2021.
- 島村恭則.『みんなの民俗学—ヴァナキュラーってなんだ?』平凡社, 2020.
- 長岡真吾.「序文—生成する時間としての「英語圏文学」」『英語圏文学——国家・文化・記憶をめぐるフォーラム』竹谷悦子・長岡真吾・中田元子・山口恵里子編(監修・横山幸三), 人文書院, 2002, 9-18頁.
- 松田隆美.「ヨーロッパ中世の俗語文学—チョーサー『カンタベリー物語』」『テキストとは何か—編集文献学入門』明星聖子・納富信留編, 慶應義塾大学出版会, 2015, 81-104頁.
- .[「チョーサー「カンタベリー物語」——ジャンルをめぐる冒険] 慶應義塾大学出版会, 2019.
- Alighieri, Dante. *De Vulgari Eloquentia*, edited and translated by Steven Botterill, Cambridge UP, 1996.
- Baugh, Albert C. and Thomas Cable, *History of the English Language*, 6th ed. Routledge, 2013.
- Blake, N. F. *Non-standard Language in English Literature*. Deutsch, 1981.
- Burrow, J. A. “Elvish Chaucer.” *The Endless Knot: Essays on Old and Middle English in Honor of Marie Borroff*, edited by M. Teresa Tavormina and R. F. Yeager, D. S. Brewer, 1995, pp. 105-11.
- Burrow, J. A. and Thorlac Turville-Petre. *A Book of Middle English*, 3rd ed. Blackwell, 2005.
- Cawley, A. C., editor. *The Wakefield Pageants in the Towneley Cycle*. Manchester UP, 1958.
- Chaucer, Geoffrey. *The Canterbury Tales. The Riverside Chaucer*, 3rd ed., edited by Larry D. Benson. Houghton Mifflin, 1987.
- Copeland, Rita. *Rhetoric, Hermeneutics, and Translation in the Middle Ages: Academic Traditions and Vernacular Texts*. Cambridge UP, 1991.
- Davis, Norman, et al. *A Chaucer Glossary*. Oxford UP, 1979.
- Davies, R. R. “Nations and National Identities in the Medieval World: An Apologia.” *Revue Belge d’Histoire Contemporaine / Belgisch Tijdschrift voor Nieuwste Geschiedenis*, 34. 2004, pp. 567-79.
- Evans, et al. “The Notion of Vernacular Theory.” *The Idea of the Vernacular: An Anthology of Middle English Literary Theory, 1280-1520*, edited by Jocelyn Wogan-Browne, et al., U of Exeter P 1999, pp. 314-30.
- Ganim, John M. “British Chaucer.” *A Companion to British Literature*, edited by R. DeMaria, H. Chang and S. Zacher, Wiley Blackwell, 2014, pp. 202-14.
- Green, Richard Firth, “Changing Chaucer.” *Studies in the Age of Chaucer*, vol. 25, 2003, pp. 27-52.
- Higden, Ranulph. *Polychronicon, Together with the English Translations of John Trevisa and of an Unknown Writer of the Fifteenth Century*, edited by Churchill Babington and Joseph Lumby. 9 vols. Rolls Series 41. Her Majesty’s Stationery Office, 1865-86.
- Lewis, Robert E., et al. *Middle English Dictionary*. U of Michigan P, 1952-2001. (Online edition in Middle English Compendium, edited by Frances McSparran, et al., U of Michigan Library, 2000-2018. <<http://quod.lib.umich.edu/m/middle-english-dictionary/>>. Accessed 31 October 2021.
- Hines, John. *The Fabliau in English*. Longman, 1993.
- Kokeritz, Helge. “Rhetorical Word-Play in Chaucer.” *PMLA*, vol. 69, no. 4, 1954, pp. 937-52.
- Lancashire, Ian. “Sexual Innuendo in the Reeve’s Tale.” *The Chaucer Review*, vol. 6, no. 3, 1972, pp. 159-70.
- Lavezzo, Kathy. *Angels on the Edge of the World: Geography, Literature, and English Community, 1000-1534*. Cornell UP, 2006.
- .“England.” *Chaucer: Contemporary Approaches*, edited by Susanna Fein and David Raybin. University Park: Penn State UP, 2009, pp. 47-64.
- MacLaine, A. H. “Chaucer’s Wine Cask Image: Word Play in The Reeve’s Prologue.” *Medium Ævum*, vol. 31,

1962, pp.129-31.

Minnis, Alastair. *Translations of Authority in Medieval English Literature: Valuing the Vernacular*. Cambridge UP, 2009.

Muscatine, Charles. *Medieval Literature, Style, and Culture: Essays*. University of South Carolina P, 1999.

Okamoto, Hiroki. "Curious fact': Fading of Northernisms in *The Reeve's Tale*." *Bulletin of the Society for Chaucer Studies*, 5, 2017, pp. 3-21.

Olson, Glending. "Geoffrey Chaucer." *The Cambridge History of Medieval English Literature*, edited by David Wallace. Cambridge UP, 1999, pp. 566-88.

*The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. Oxford UP, 1989-2017. *OED Online*. Accessed 10 Nov. 2021.

Pearsall, Derek. "Chaucer and Englishness." *1998 Lectures and Memoirs. Proceedings of the Academy* 101, 1999, pp. 77-99.

Rushdie, Salman. *Imaginary Homelands: Essays and Criticism 1981-1991*. Odyssey Editions. Kindle 版 .

Simpson, James. "Chaucer as a European Writer." *The Yale Companion to Chaucer*, edited by Seth Lerer, Yale UP, 2006, pp. 55-86.

Smith, D. Vance. "Chaucer as an English Writer." *The Yale Companion to Chaucer*, edited by Seth Lerer, Yale UP, 2006, pp. 87-121.

Svartvik, Jan, et al. *English: One Tongue, Many Voices*. 2<sup>nd</sup> ed. Palgrave Macmillan. 2016.

Tolkien, J. R. R. "Chaucer as a Philologist: *The Reeve's Tale*." *Transactions of the Philological Society*, 1934, pp. 1-70.

Tolkien, J. R. R., and E. V. Gordon, editors, *Sir Gawain and the Green Knight*, 2nd ed., rev. Norman Davis. Oxford Clarendon P, 1967.

